

花街百人一首

全

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
1m
Tama
JAPAN

花街百人一首序

壺中乾坤あり。命と吉原といふ。春と
桜を植え。花は盛り。爰へ移り。物の
花と色香と争ひ。殊も又燈籠俄の詠あ。
不老門が逢門と称へ。春秋富リと云全盛
遊びは更多く。馬鹿らへの毎日。ふも満月
出で。暗の夜も吉原なり。而角夜可ね。吟
あり。後朝の雞四角なる卵と産とも。人更少
珍とせば。色が以て丸りて。人體を造り。是に
加々ふ浮氣が交り。少極もと常じ。堂々る
男子とも。園子の如く取扱ふを慣れども。されば。
客も亦角られ。圓く成る遂ふ粹す至る者
不少。長袖能舞。多錢と賣の謂ある。嘗て
いふ色世の中浮氣の浮世と云。他より此廊中の
別称。有り。更明け。

安政三丙辰の初春惠方ふ向く

東紫君の名代をつとめて

年増の新造識







陰陽和合の始

元男女の情慾の発展を天地自然

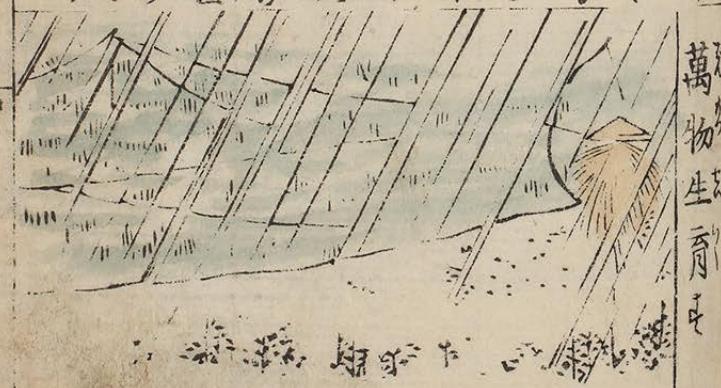
三
の妙理と



九男女の情慾の多所生々天地自然の妙理之
色慾煩惱とそ新成の教するうべ服若の叢
会とひて意中清淨あるら此體の異端有
生ヒ活立りの男あれハ女あり陰陽和合して生立
て而あ済する男女の情慾を極むる事アリ六經より
より人間が情を離れて附へ日用情に付て雲氣化雲氣
男女の情慾を生あるハ天地同云體て生ずる也云體
五施して万物生焉ノ孫繁昌是男の妻妻
と愛し婦女の男然云ハ尼自愈の正理生民
の大なるうじやさればともん中不色慾の有
財の天地の間奉ふ靈教者も時折あるざり少
齊一屋まで萬物の生焉を遂ぐ一社主の

萬物生育

附情慾の隆するも春夏の雲霧の多た不図
く老人の陽氣もかゝらず情慾の薄くもへ秋
の晴天の日がくると中古よりの俗習
にて色慾も謹むるの外人らんとる者多
くれども原來俗の中うにぎ五常ごじょう伐木す
生う者へゆき父母をえて是が効り仰ふ候て
繁人小者卑の陽へあれど時並れば多くは枯
死する色慾の反覆すと深窓の裏不育ち附々の
者へ更なり御うちあどひ一つ生れても難き事でもよ
萬でも色慾がぐるをほゞ雄めおれう相の
かち生る故も老疾て衰弱不育のつる因にて地
方の傳承を以て其事ハソシキ事也



詩○周南小曰漢不於

花街柳巷光景

詩の周南小曰漢水た
漢へ水きの地名を、かた
マ人而ヨク一一大古より
と鱗色と好む人情の
事すと善え者漫不
立ふる河哉或より售主
の昔バ又あひて度君朝
平家の二門西海の浪の泡
ときそ生滅る上薄う
と女見と行きと參
長門もりまよみとひ族
治の人ととさくと華
奏と凌拂の塵とも
ひり林女の夕んよ
と御庫を浦々小舟即
ち同が國家の体は神
修水車の名ト發て可
能ともひうれ女と
よえうれや一あがれ
の上城あれと遠ふ
移びれと岩の川ま
とあると今古



世の人のふすとすを更に懲る
夫婦人意へふりうるの事え
有り取身かくまばあたぢう化様
せり女の衣裳ふとぞのうそ
アーベルのケヅアキをあざえ
先づうれせよわゆふるふるう
ば喜ときめむちるりのり

新婦人と花形自在の通カトおもい

小もほん女のはの腰のぬれをみて

忽ち通穴じるひゑを

すこにてうりとてす

きよもうお肥あがくらだまんかいふ

総て傾城とからんと

欲むる者とののね

あり身一ふ情せせ金

多に用ひがりどし身

二ふ世のと人情にう

え者へ携ふのがと

うれ才ふ能

おみみ

旦の

教情の意ゆる者

を大門か入る

多くりう

ひかり



卷之三

寛文二十年、や木吾妻、物語細え紀と聞かる。小元吉原の附多尾、くらへりの四人
あり。ほそ子丁、子同義、内多尾、同丁甚なる。内多尾、糸所義と、弟内多尾、同丁
九多尾、内多尾、以上皆女也。にし女も、そを元より三浦麻の多尾下す。ば共に、
尾とり名姓あるべく、人も同名の名のこそナド。彦花園大人一財の女もて不高
尾考あり。京山、宿もか作れど、かども、算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ算ひ



秋の色も山のものも
絶えずやかに暮れゆく
君へ今さら何を思ひまつて云

四代高尾
水の谷高尾と/orの
谷底をうとり木客船
をとひつよ

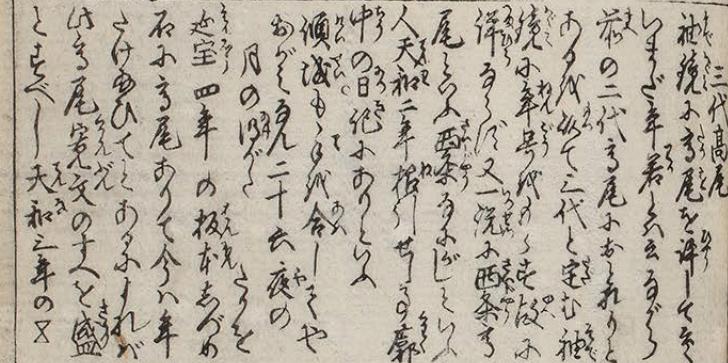


三代高尾



初代高尾

歴代の内に至りて名媛の傳流
すしと放浪の尾と不興
整襟の如き歎びの統ふ風
て二代と定む世ふあられも
御室ふよまれて全盛と云ひ
み有まくは名と流れて
家ふ立てふれや冠寵愛
とえむくもせうめ
めでたらあらじそりと



とぞノ天和之義の如

既解也

百首

五代高麗

沙耶ちゃん尾とひあきのと
いふ太郎の人の事もとく

上多賀
後院

五代



尾高代立

大作高尾

といふ處室六成年年後の大正年十六代尾
とあり也とぞ重
室承七庚寅年十九のち

大體ふる屋
の名あり



尾高六代

九代高尾
嘉保元庚子年出板右栗
丸達不奥州の兎もがぶ
との不の正徳元年不支
とある是元治も尾より九
代め多尾もはしゆ地と
未だ足りあれど密
統六度の板本不六代の



八代高尾

八代高尾
正徳二癸巳年板本木造



七代

三

母子二年
出郭せる

お尾とありて丸後十九歳
の尾西道ス年不^で及
とあれば六年の^あとく七

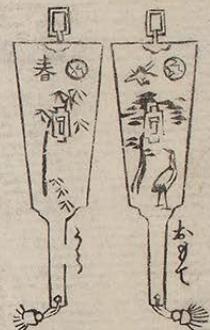
代八代と二人ありしより
うしろも二代も全盛期

謂ひ廓の事へ計外小
事二代も

卷之三

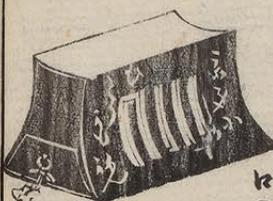
中經卷

高尾行持の毛板



土代高尾

嘉保十九甲寅年細見毛
三本あり二本小手巻す
一本小手巻ありて揚すたの
巻ちや萬年十月九日
出前もとをもととひらかれて
松本四海花美ゆきの子えが先
御也高尾小手巻ゆく一色
うればい高尾享保十九年
十月吉支とよしとひらかれて



新や二本

薄雲

の奥州
葛荷衣の施た女多喜文
の後の全盛ふーて其在一
時ふまー一若狭守の大繁ふ
貞清美婦胎
虚言偽子
文宣院くせつとそ
ね花堂はまびて能おさ
其の附合ふ
とあら御くふ

奥州

東北の歌

古の句うへん不思のわど
もさーくまこまかく
みもあらかくもだりし人
のあらのまくさうひめう

もととひらかれて
の巻きの花す
紀入の花す
軒の細見え
花絵見るふ
の巻きの花す
宝曆六年の

洗ひ聲ふ伽羅をとむる
枕あり金紙の襠みにて
一筋の聲と詩吟ふあら
志死すえは枕ふ

薄雲

奥州

東北の歌

とあら御くふ
ひまちに経文
古の句うへん不思のわど
もさーくまこまかく
みもあらかくもだりし人
のあらのまくさうひめう

高尾牙置
高尾牙置
眞水入の國

表くれば
秋月



高尾牙置



高尾行持の毛板



新浦。薄雲。尾尾の遊女
あくま尾尾の遊女
のを丈すり裏川附後持
をとし不元源す辰年青
源六とり者数百金放出して



奥州

○勝山

卷之二

山本芳潤が抱の姫女房

の日本文化の基盤のうちから
運営する小説家で、一首の

卷之三

妹背ふき川の

私處流連して血氣
好ミ蟹の風ふ勝山焼の
一派也甚り又寛永の段
京四条の魚水寺舞妓
あし本島田昌吉とり
女形籠の玉支一とゆひ

常盤

是も才の山本芳頼が
抱の姫女房共に勝
山と物ひとあそひ

うのゆゑに
かの世人あふ
るべからず

卷之三

卷之二

卷六



上浦の抱姫あり種家不名多紀平井の妻小
娘ノ二代の養家ありとく謙おだ姓を承
二世の約束より一て居るを罪ありて失うし
後勤の身の年頃代持く男の孫を自害し
國父小比翼様の名御油草

濃
翠



居候よりお見えを終月を用ひ
身にゆき不あらが事も 空井

の王菊
万宝庵の抱毛金盛
ふみの匂とひの大飴を好
えて渴つてあふ世が早う
モトリフ。

ひよそと薄の掩の

もうりのつりいびと
おどりのせ代のまじりの玉菊
萬葉追慕とては東都の津端で水調子といふ所あり其碑
もくほのひふ固て歌れり今かいつらむ仲の丁の盆焼の竜の始りも仲の丁の盆
虎文揚庭丁松垂八三（お人聲をみて准へ）と云ひて享保十二年六
月廿五日法名菊頬玉壽（信女せみ齋淡草新姫永寿寺子墓あり百廿金
年の少子死りまで連縛と續きこと玉菊が巧みり
。 猶若蓑ふうた玉菊が死り夜の舟ト向ひ

元吉原開発の夏

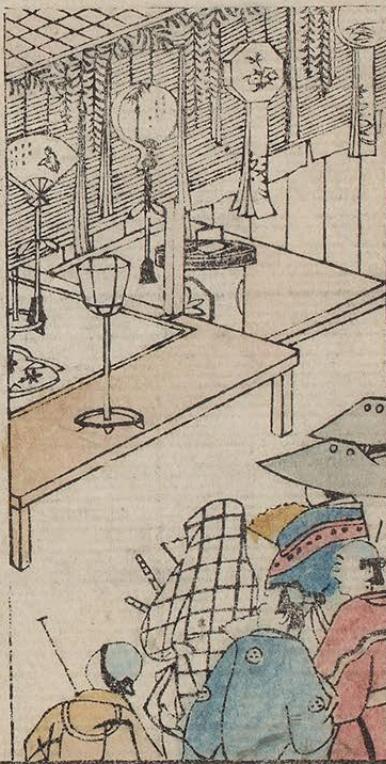
玉屋山三郎内

歌舞伎
若妙

慶長廿二年八月廿日
て是よりたる石立
二軒二軒つて西すあ
ゑの中にねどちく驚き
ある石立石立
八丁めふ十にみれ又後倉山
小十八六軒大橋柳町に
其新やとひりとひ大橋
えとひ今之常盤橋の
古名にて桥の大本二年
のゆゑ柳町とえとひ
えとひ柳町とえとひ
江戸生れ者より多会



若一
わざとひ
草ハ
虎の
御草
さり



卷之三

色の者ともへ大似たる
變形ある。猿の筋數
町木にありすとか近所

の者も京都六条の三毛

伏見多び毛野町の本
辻の者ともに藝業成る
事あるべく毛野町
固れて家業と爲す不
慶長十年の以故もそえ
藝預ち前一折町の者を
のぞむが、移り方甚だ
相引小国家の商人をして底
司盡在毛野者い外

京都大坂橋

されば今大江戸を起立せんとて初で公私
の事に坐て慶喜十七年夏
御令旨を下す所にて
下小かくて二町四方の
沿地を以て高麗の武官
うたは滋考生て源氏
あ地形を察して故に
御令旨を下す所にて
元和年冬地附て家
善湯水から同四年春

大黒屋文四郎内

萬之助



卷之三

転て同小姓をして姫女
姫の廻城開化院がおふ
院の室賀吉子女として
吉の定めもけいせん買ふ
接する者一夜をかぎりお客
をもせむれゆえひき人
の外も姫女をいはばき
多姫女の衣類へ紺や染
を用ひゆうと定めり
事跡参考から家松奥
之門のひじしへ入る後院
つたまく傾城町こそと
あれども共に大川のモ
リ屋のひき入りて
此の水を汲み入る
草 広間蓋在焉の細井
就して浴戸の石もあれば
女庭たて石も集めて傾
城町の一處となし吉原を
今よりしそう玉手を勤
の若人絆はがれてこれと
と入らむと姫女たのも
ゆゑ其鬱悶の事は
あれどほんと後院より
ゆゑ多く至るにされど
きせん入もそよけふすと
みをそよひてをかくと
ぬ曲渦ちうれまれあれば
レの方ひきをらざき

尾張屋彦太郎内
ひわらやひこたろう



内食 めぐらす本から井戸

和泉屋清藏内

卷之三



（略）



荒立家作秀経の間

岡田屋宗兵衛内

壽賀岡

ナガホ

角の道近今戸山谷馬糸
も備毛で一松金鹿波
せもくの長軍一郎小馬糸
らきがゆめれい一同お
ほひの色成りてものね
たえ町家西郷家と想對
して御文通ふ後日大
月十五日あ月季く見世
とひつきや客銀相まつる
おひす中の御作とあく
きせんのあくともきらむ
えと山谷道ひとおも
けはあくのえハ大江戸

夜
鶴
の
梅の花
サムライ
神鬼の舞
ミツタケ

箱本屋庄三郎内



おもかげの街家金石
さく家うきを後あかで
猪手すり本格てとひ今
夕ゆきりふりうれ留國
川もひよ成事くのぐく
きのまうらのまじゆを
がおゆくよ上諸城
ふ谷通ひの金馬た
の裡來ひなもよびえす
えまかくまたのじきと
しおうばから無思ひも
おつりても精善系所の
あんときそだ因み九月と
小家作秀経一松金鹿

都中へ三日後も新成
ゆうじだり

中万字屋彌兵衛内
みや

賤濱

岡本戸と

○立町丁名の吏

吉原あすとちとよひに戸
町二日同二日月京町一丁

町

内角町の内町



風発ひ木あはれかねむる
のを繕い 磨拭ひて所で
りふすをあはれとせばほりあ
けのせの町をゆくと見ゆ
太車をこわせしと春はを
わらひりまくと美室をま
めのまをゆくと美室をま
れのまをゆくと美室をま

美室

重岡

岡本屋長兵衛内

右鳥もはてに御居をとめ
御ふ二もの豫食はしほう

う者う換う居うとふ

京所をかし町を往う者

第三方の集れうう二あ

京大坂う逃うううう

事をほ跡を一春年かうき

て町迹をあけるとお

町とも云うううせううう

角丁の象徴角町の抱女

底ども十秋ゆうううう

て居じては小角町奉

之が地本町迷うじて

の町金く傳うじて万治



の
立町
重岡

物やうく見

六

より寛文のじめの貞子

海老屋吉助内

江戸所京町角町の丁名

毛氏
大井



姿海老屋久兵衛内

姿野

さうすこりに女店を大
金が出て抱かれて女を公
人されば何處の者もあら
りの不抱絶代半のゆゑ
揚店が更に其がうの通
れなり一夜の妓女を貰ふ
まゝとて女めのうる客の
方おても身形をにら
万ゆみの身守をも巧者
うる人ふるうひて坐骨ふ
きと後世の人亂に
そよぎふつけと揚店の
女金をときひ客を安

百首

正徳の御子

松葉屋知賀藏内

白砂

卷之三

をつる塚町と書ひて
ちゆう

禁せられ、故の者た

原町入志丸ノ據所

二月三日

トシ又傳の丁口ナ町二丁目
ニ丁馬角原、約金の付立人

むし狂妄足早の事と
ゆるめあはれの處

本居宣長著

新居の事

のけゆゑて吉永の根元
などされば蘇木かあ

うのとくにあらわす

二丁目の商店街を市場

卷之三

卷首



甲子樓內

雜扇



あらまうをひきとみじ
ひきとりつてひむせし
へちふみにかくと
砂利場とえの井戸
お水と吸へり
元源の東揚尾子尾浪
底波す事方を初め
始めに水をあわせし
みはれりこととさうなる
きりくもうちをひびは
井戸すりよめあつて
あゆ移く含糊と生
仲の丁の事よりあくび
鶴の聲

The illustration depicts a woman's face in profile, looking towards the left. She has dark hair styled in an elaborate updo with various ornaments, including what look like flowers and small bells. Her makeup is done in a traditional style, with dark eyebrows, white eyeshadow, and pinkish-red lips. The background behind her head is plain.

鶴泉樓內小車



麻中大門の前
御殿裏を大門にて
水庭屋と間敷多方面
三十人御余候も多事
百八十石余と云ひ
うれしきが多と云ひ
石六千七坪

尾張屋彦太郎内

を成 満袖

花の さかり

吸と氣吹と氣あま
かす万審多くはる
つう夜絶とくもくと
なりせしわが在あらぬ
纏絶の附よより大づ
きをよみ車お名附つけ
うしが移く連海移
て三曲小名遣り一くる
うの歴世の風立舞ひ
うりしよりうりし紹傳ふ
り引物揚毛へ充若
朝の時より大門に立
めしとり起初移物
難ね難うあひそむ

お馬の人は不ふ跡づけ
ときり旅人の井へは里へ

りある旅人は不うて是
と迷ひすと免ひぬる
柳ハ古客きゆくの御
内みゆくば後代えほる
の後とうせうる名すり

大夫と呼名目の吏

昔のね女の只寝衣と

のく進う者ふうじ
向拂みの風のうてあ
曲のげんとくふと列し
て肩おのの肩おののも
夫札舞をあひと



うされべ申すかのち丈

をもてお駄とを又と

もひう次第と捨ふ

もゆめうた捨ふの

お駄代うわゆ捨ふ

女郎と云ふいじう

新郎といふも娘の嫁

窓の中ふ音するせぬの

新郎とて妻といふ正屬

の女つよ女の童のゆふ

て蟹と云げてむきみ

とててひしの名

きしとまくはふあど

とをりふるりそとあ

うれとをひきとあ

女の里の落葉をよく

ゆく者二樹中の

新郎と同どう居い者

とて新郎とて新郎

中どんきじ下者と

て新郎の役とつと

もりうり又一選あらわ

物の流れとりふ織成



稻本樓内 小 稲

春の
れ



久喜万字樓内

名山

新郎の

ありびのまくら

岡田樓内

萬山

谷の戸と

島

万さんのがりうれてすの六
ふうりて柿とあひゆる
のうとうらゐるそお邊
ふぬをあくらうへ出
えんとあら附む事な故
くより七石のあとづろ
とりひきのつけど
とくとくとくとくとく
の因縁がりちろん筆や
かみ宿をねへまどる
よりきり又おはとせ
てあその方へおるわじ
よりのきみへおみえだよ
かみのわによして清



中万字樓内

角万人



萬葉の支

のうれへの本の意不及
わも秋みどほきう出
あくへやうむのゆゑ
もうかうやーてあん
とねふすありあはと
うてれ遠とせと客
もも入用うぐはせん
つじあゆつとすも
あり又もくして新若
夜々と寝あてゆる房もあ
りあくへよのすな木
ちくふうり

いや 一散茶柄茶うどひ

つがひともとみ名目へ轍

も今のりのふりあを

差別のばくうかまちを

一風流の後りうち

よりよれへ織思の地の

空ひあそきの水の流れ

ふおもとめすを又

いきあうやもくう

もそんとのゆきと

つみせしへ床引まなう

まきうと云ふくう

わらひはれさりゆう

りうてすこととつよ

か部もれど今大よ

ひそめうごくよめぞう

ふとくりうるふと

後おのけびきうねま

もくたとあまみの

きくよくうるよむ

切がのけうくれま

て里されとうぶかとま

。発立突出の吏

のりゆき
春之家



七里

姿海老屋内
身綱

神 ふ

院の

身綱

の

身綱

の

身綱

の

身綱

岡本樓内
萬生野

萬の

身綱

の

身綱

の

身綱

の

身綱

の



あさうとやつてく
そうちうるると
きりあらうもあ
一人まの事節ふちを
あらのえんせんを
きりあらじみども
のものせうらいく
きのきのやうあら
きのきのとつけた
きのきのまばつけて
やうゆうにとま
ともとおなれを
もじのうかくわゆ
あんとおひのうかくわ
ひとりもうけりのう
さひとうでぞむる
やうおありひまわと
のびてもうひぐる
くきすうされする
とくわくもあたれ
うじやすすみすく
ては里へきの者へ東
まちとよめうり脚
部としゆのうれぬ
がよもとをのうの
ねじゆくとくじれ
りも重やうと有
ちくえ潤とある



えさうと見てうそ
そりかくすら寝てう
て座やりちこまほに
きりちくらもあう
一人まの事節ふらをと
かゆこのえんせんを
きりみあうじよども
のうちのやうらいく
うとのせきうとす
えりのやうあらみ
そむくの人とつけ共
くらのまばつけて
やうゆうじひとま
ともとふねえれも
もととありのわたくし
もととありのわたくし



て衣裳のうもあつた
夜々とんとよどぐ
おりつまでもとのつる
きをうすむのり見せ
つたはしといふ事なか
やどあがくも定めつた
の重きとゆづらひとお
とそくそそれへはま
くるより又の氣にまれ
どもむじかることよ
るのいろ色のあけ
きのやれたまくあき
しきがくとあり如何
そしわのまことに
身をば内ことじるそ
ちうだよのうちびげの者
とはれへ二年二月のま
とうとするものなりこ
のれたり

王樓內

若柳

卷之三



同樓內

漢書



出で御内ことりて
あらじよのうじゆの著
とげ石へ二年三月の事
こうきゆるもひやうに
のれひたり

貧編笠と云古文

徳富家と之の大門の外五十石程のあ
例八十引で取方士官ありしより是ハ中級
下の人々の通商が冠りて大門をへりうひ

あらわすとくらげ用
ひりのとり不偏三脚

甲子樓内

舞衣

百首

九五

あらわすも途中で、間
詫せばかうね板をさす
るもよしむとく
又すへ船をあたえむ
双方かりきもくもくね
うどある。心ひのぞ
のほへとくふくも心外
居ふみども編笠を
着る。めぐらぬれや
まのへも武礼を
せびとくもくね解す。

久喜万字樓内
舞衣



元を承のひい夜床と
あとく。新吉原後
あうね換ひる者の人
を替へてあふべ

土牛節と云賣

元を承のひい夜床と
あとく。新吉原後
あうね換ひる者的人
を替へてあふべ
人通り疊がありて
人通り疊がありて



百首

九六

おをかくおこひふ

尾張屋彦太郎内

おとし

尾倉喜

おのむきあれどくわせ
おちのがよめぐら
ひやくの代よめが
あふれを身のぼう
くまひるうみ
おもちのちゆこのさりと
すだくふうれども
くらびとかひよのあ
おうびきも

けよこのひへきまへりと
おおいかみに町の事
やうにきりされざさ
月とやうだとうく

おのれのへんのあらのと
おだすのへんのあらのと

おとこてきはと
おとこてきはと



大黒屋金兵衛内

八重咲

トヤ人
花とがくふ

トヒラト

仰るのこよみ
もしもものらぶけの若
人ちか弱て春まへ解
ひ一月後成まゐる
みうらひうらりのうりと
さうけはれぬを成
さうけはれば大才のじち
とおりて後輩風流お
もとくされば大才のじち
「あもん柄」とり、ばと
相識すともむ縁あな
ト成花園をそれより
もむねにふまぐりと
さを酒あゆとけ里うり
ひとと寛永の中

有りてありてはあらや
て髪はぬとお女めや
如代をあたて客室歌
するら吉永一とおふね女
と詠評わかれ一時

市中のわちやとりの
のうだい掛止とあれ
せう柳原邊おねじ井戸
よの 门前と名代の風
呑氣ありそひあ頬の
人とは風呑やへて多若
を改めまつてあせむ坐
かあくゆたきの坐た
もどりとてまづうて



櫻屋源次郎内

芳野



大庭せゆと太門をすふ

うりえすゑ(めだ)ーと

りふをもとの附のまを

かうやううきうととをな

りゆうせんきく者をの

きのうゆてそれもと

おほくおきのあらし

きううあめうせばね

云ふあくとくにむ

そりまつね

王樓内

若菜

雲ちくれ

そりまつね

西風



金子伊勢屋六兵衛内

大淀



みよそでわづの異因
へ省とも女郎とも廢
もとたもとれどひ
ち古聞の御わるなり
宿生揚の食事れ
べ相手本を歎病も
わづうべとまくと
けの御ひせても
御事をうづくまうと
りふれつゆとすりと
體も毛のつゝ髪もす
れど女もあまうぎ
うそみせぬありま
まくれのと味せんお
きせりとての写
あは

邑田海老屋彌七内

りもこのうはひり
らへぬきとせむけ
又をほの定めあて重慶

あたへ年より申すを後
船へ暮すより四年で

ありしが龍よりまの

鯨へりとあたひのゆ

きのじくのあひ骨そ

弓の種あひ松子あ代

うしとく九つのゆ

とおふ本の四りとお

て夜あひをあふ

かの時ほねるより

さうゆふゆの写引の

王屋山三郎内 王葛



角葛屋万次郎内

谷城一
あれべ

葛葛

ふきにのすとすらむ
りまじとさきこすりば
うちも草あそびゆめ
月と花の街とおせ
女のうらやましいもする
うたはひの花絵が
ゆうべあやうあじ
と一同おやすみれ
ども莫をきの恩恵
をうつて吉原町老舗
と歌うて日暮繁昌
りすり御みゆくア
いだにしある所多く
ねねかづらうるゝ
ねねの歌辭をかく
長き後ひやうのあき
えのうに村機危れ
舞の弓矢一の弓仲の
丁ふ地直花代不する
杜安小えやく且ハ高
花水材久家業の難策
うつゆきも行ひくと
はるる花道の方終極
因縁中先わらずとや出
うち石よ連ふけすを放
て附へ寛保元年正月
のまより仲の町の生中
かぬと見て春海小橋
板石本を植て名石見え

大口屋の内

ありの
おせ様
もとかくぞふ

山の風と

櫻木

あら経き

うれもつま

我の

思ふ



物の一つとひき引 唐云

尾張屋彦太郎内

の傾城町ふ花街柳巷とひき引

誰袖

わべ仲の丁に揚火櫻
の古実ふ叶面手と

手拂禪裏まゆもだれ
きり大門はうねて風
すで青竹とひき引櫻手
とつうをえ方もうき
拂きうゑ下巣城め
らひ夜も浴場とひき
咲ものこころ拂ひとト
あぬあうゑを葉正鶴
歎の姫撫し絆あうけ



かひじゆみ
まかわくと拂
櫻 丁山

いひぐらうと拂
うけまくと拂
うけうふの
うけうけ生

丁山内

丁山

中庭の月

逢坂

相模屋新三郎内 王波

甲子樓内

かきのさゝれの花遊
浪花江

とあらむおとくら西葛
の遊船を嘗へる長壁
ま七月の櫻と改えり
て一用忌も又焼菴本
念成全く假りよ向
ふ山東路の津えりゆ
れ細あとよみゆけま
てお菊の身のよそづ
り今と共時あるの夏の
葉の千ゑどのふえもあり
ふだらふだ萬といとも
ミ一ヶ又二回風ふまや
あふす軒をもすあり

あせらとおお船を假り
一色不夜忌七夕忌
お繕やくや合せ
とくのこはん地萬と

つねーーうきやを
萬保みゆうて同じ焼
萬もうきよてへゆめ
りうきよれい十日又も
焼じく石之く出

うふ一人見やれゆ
見しよりいつとく初
きのより後の方どう
ひく朝聲萬ふりき
ううお用もき定則
ときて石金の今お



花游



吉妻屋甚萬内

久喜万字屋内

雲母の 唐土

遠くをあわゆ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

うらすで毎年くらう
びておれのよとあり
るときり

九郎助稻荷の吏
並云禮俄の吏

は私と元吉原発の
附其邊みあり——祠より
島千葉九郎助より
の地面小觀結して
田舎の陽があり——裏

園の陰いきりとりく
豊熱と行ふ靈験
草の根に植る靈験
の名所也と云ふ吉井へ
アーチ下のもの様子と
走り一毛地の史跡をも
せのひ男女の筋屈伏
腰ひのふとて人筋伏
坐りゆあひとし祭事
禮もあひ八月上の年
日よりしがれうめ日
門の戸

移りあし財氣が移る
山改めを又云一位羊

アーチ下のもの様子と
走り一毛地の史跡をも
せのひ男女の筋屈伏
腰ひのふとて人筋伏
坐りゆあひとし祭事
禮もあひ八月上の年
日よりしがれうめ日
門の戸

金屋法事内

豊浦



ある年より経て
されば高柳と見て延
喜院延の御より上方
の大鏡りあひど彼地
の大きさりあひど彼地



の織をすくてあらる
りのとくあらの織

机縫して移りやへ通ふ
さうされへ程をめほ

ても漏れつけてまゆ
も機るや名をきよ

者を歎た累ねふり
て遊世を辛難奴役

者をあらじゆく、夜
忍むかふゆままで若

見し笑つしてつむけ
おとせられりおとせ

りらむ城ふるひ才を
ひぐわくしてまゆる

用まつてもむきはまう
こも極盡してまゆる

や、城とりへ名のまゆ
く練轡（ねりまく）する

よも名ふ角（つの）み
車（くるま）に籠ふからりめ

ある不ぞり織ふもからり
めぬあて晴天（はれび）十

晩（ばん）かく又わふ之（の）より
さんかくのうのうえを

なみぬるのうのうえを
りあゆるのうのうえを

よしとひおとひよしと
よしとひよしとひよしと



丸屋熊藏内

あれづか 小菊

うすむすの夜



登丸のすりもあらびえね

す。者多くはしませ

。朝日如來の支

恵公傳 老ハ世ふすへー

お村う一日船つてあし

かくわざう白のうが葉

洞ううじゆく地あまの

きをめあらすも遠の

えをきたりとねばより

くくわいとく東

内小舟不れ日の水木と名

づくよハ松傳ハ江戸日

本橋通あ丁のあ良木が

歎く松代はく木はく

あれう代の候考そ

毎年七月十四日より十

五日まで國体あり又春

秋の彼岸のうち十夜

中を用賀ありと多番

下を幕すまほあれ

者あり伏見千葉製

たじあて生一海を絞さ

和泉屋清藏内
みちる

立花

人乃

ひ

の

深

水

が袖

あ

附面

のも

重岡

水

田

一

れ

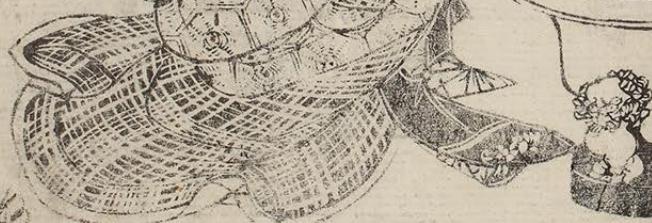
れ

れ

れ

れ

れ



卷之三

佐野 桃屋
佐川

佐野 桃屋 勝内



主を功能ある時代の
物と云ふ所に有る者様
の多寡の天澤の自筆
より今お尋ねするもの
うち一通によて知る所
の仲の子作村俊勢様が
お薦めされまつたア丁二
丁目万座町よりとりよ
者ニ支一端あけへり六
と申すてまひ一トナリ
次又最中の月と云ふ
名前新し時事に聞か
れぬる事と云ふと世本
多くあるおの家の月と
令はるゝ名をて布着り
し時此最中の月と

小
藤

の
氣の
わともお
うそくをき
雲の
かくへ落

不満の名もて而居り
レ時代最中の月より

あ仲の甘草あ底の本
がまく不羈まきトて有る

○山居至
山居市町が制定する要
より大至の極端者
もそぞ齊の経品とれ

又吉承揚とその他の
景とすと今移製業も
古物の松屋友三郎
自ら制衣一通むとく
鬼帝君の御用機器へ



山中
の
老
猿

の
の
の

正月廿四日

1

小藤

時代最中の月より

うり漬く茶へすとんや
冬月が漬はむとくよ

今へ茶庵一統のゆゑて
降りうべきとぞどももの
桂裏くるる代物をも
みし

大盡舞唱歌の吏

代太を年よの小廻こまに事
係きのほ二東那ひがとくとくが作
りとくとく中村吉義を
官くわん舞妓役者まいぎを
声こゑくく小唄こゑのよよき
西酒にしう中の家いえか吉
東遠名ひがの物ものとくとくとく

あづ林

喜瀬川

甲子屋喜多郎内

体れ
うら

うら

うら

山さん山さん
輪わの
人ひとの
あく爲まきの
枝え枝え
門もん門もん

金澤屋久助内

ひ 菊

ても

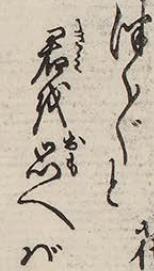
も

も



平野屋重五郎内

花の戸



居城

みをあて

ふのかさまの坊食らひの
とうわん坊ちふ名譽
あらへふる人の坊さん
長をもとまわへ孔子それ
のよりツトセうまうじ
我哉おもむくやまのツトセ
かるべ思西にやあれ
ものあくホシくしんほん
三のまくツトセエニヤ
アリヤナニ

四傳の居もがゆふ納
子代ともちどくされら
あく大トノヨリ成るま
ナアセのつだ大しん

三浦屋喜壹門内

和泉



居城
花の戸

別所もいはくもゆと
引も。袖城



和泉の花

うれり黒にすさん
と圓鏡の鏡ときどき

一蝶身紗す角球や面

つらぐの舞人共もせん

おまんふおまんす小室

后六君玉湯おまんさくに

清あすけの月のそれ

みや扇美代成才すけ

まろはアホと大そく舞

まへすを次の大トーン

唐か細なうわねる春

暖まへおーみやまくら

まきまきかくくる買ひ

よもぐり麻ひしんどう

いづれどんと年譜の音

ともじてそめくおをま

格より舞馬お歌茶樹

絵もみだすふをかと

唯み鳥と飛む鳥とね

ふにと浦の大洞畫まほ

こもちありのがんと申

夫と角丁の名めがたき

えん舞はるまへなまの

次の大トーン

日本の方はと物丁の名

あはのまのうねけの角

丁の名め天國の太施

翁ハ二丁月の名をむ



附录之九

稻本屋庄三郎内

又左近の庄司基房が
まことに大そ舞伎を

香扇

ニア多段の大そ

10

十三

木曾川大根葉の名
木曾奴勝山身丈も初

よりの如き形の如き

大至生の音えきナアモ
次の大至

細切の始りハ角丁木

後ろの居をうらの

物語の本と不思議の樂

かくれうちだ大義兵の名ねふ

を大切。アホ大どん

大正元年その次の

其余多就之矣

の席せきあくまくに見え
て、かうの後ご

御身の事

年の今ふれりの



新古今二二二

新今様の唱歌

胡蝶の舞

花扇ふる舞

袖あらわす舞

今拾青蝶の曲

一名青蝶春秋

揚をせどりうち

まご移りやく

雲すみぬはとめ

まくねびといと

のをもうく

新今様

青鶴二月

川と夜流れべきりする

花扇ひたすらすすみ

おおがへまくらすすみ

のふれどひまくらす

の枝に連続のあま

みをむくらすすみ

う月うくらすすみ

布くられ

のをもうく

中元守屋彌兵衛内

初紫

川谷

岩

山

木

水

火

風

雷

電

雨

雪

霜

露

霧

雲

霞

月

星

日

しのふりの

松田屋家壽内

明石



せとよそれくらむを名も

すやうちをあそびうり

ひよくの麻夏み國の

扇の風をも

春のひと夜のつまえ

舟さう秋月舟

まつ。かのまうさまう

却や袖の香とす有

のうづ

難名をひくゆく袖

ひ難ふやうに揚羽枝

枝上あきしはめうき

りもじあくまきをね

ゆう一念

開ふやへ寝へゆりこ

ふくつりのあらかき

をめ持手の内よりう

春をよふお拿され門

をう

新曲浪静

壽叟少人述

年月をおひれぞ
あゝ人えふり成初る
の後ふみ綱べやさのた
ゆこのうきあう「あれ
あきえへるどうの相
袖やさふるものどじ役
をもまへぐ」波をきか
人月冷々の抑え

若狭屋豊次郎内

さだ

秋月

あ

星宿

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ

風

あ



まひる急風まひる朝
よさくのまよふかくらび

えせ

女のーかふ

万字屋千代内

浦波

ひりれまくら

おとめの今後を舞せり
かうた例ありえ言葉の
葛城くみるおとめの舞
の上よつて既おとめの
鑿り場を立れそとあ
さきははくそとらふ
今之地不移りでも高
尾原雪ふじは櫻花の
ゆえありと見里あ揚の
至人好車の貨き故ふ



浦一 さむ

叶屋安次郎内
和國

の様をもうりては一西成
再興あり一ふ其船萬
人間代驚きり奉平を
樂しむも莫と久歌わ
同邦の秋再び今松
つげ多るもく某の
客人ふかづく
魯骨鉢翁述
遠く桂高寮一
道く角財をおり
小湖綠燈馬糞のわ
ぐぐする世へや



ちづくよし
梢うじくそ
蝶の塔寺

卷之三

中大黑屋兵助内

改廢簡易記
主として右文のなか

名に至り今後少
長トたる者あり

貴の仕方の仕上社

おそれとて通三河

岸本實有

御紀年平七郎恩
澤元治一貫

優約の様子も表原

金盛社

卷之三

れ来て、松久屋の
料を加え、他を以て

人を多くの難きが如
れりあれども世下

まつりとく 手女を
ふみのむねうき



花岡

岡本屋勝次郎内



花鶴

中大黑屋兵助内

さうあると作者

卷之三

津國屋半三郎内

と衣ふ 機縫ひたは

卷之三

也不滿く其の如き

卷之二



春の曲と号す
晴の一曲と繪しまる
くも付運すかひ疊
夜ふじの遍りまゆて
面見代絵いろ夏明年

佐野倉屋 権三郎
新之助の孫



そせんじゆる吉田客様
の公差國不隨ひ衣冠
事改大内具不まみ奉
恩おへく挺身大晦寺入
新業の今後大晦寺入
も復舊燒籠城の
おもろそれべひをあび
とうけく正服
に光東御事務の空

卯初秋

江戸町二丁目

甲子樓



越前屋至門内

いひこどる 楠瀬山



其四季桜の御うき

一叶が
さすにこゝろ桜の四

季れは桜びと交わす

さうびはえせり

さうき事

さうひはうだらけ

三弦

小鼓

大鼓

鼓

室月夜

花柳壽助

寿屋山人連

久の室ちのくふ

のひくらきかドレ

歌の甲の所れを産の

静すよれいとのあく

もぢたまぢ——柳く

らのあやか——きぬひの

りやのじうかみくさき

みのづひのひまく

みくまうのとさき



倉屋書代背

の見

倉久

久種もかれて

不見る

筆の義仲

筆の義仲

其のうれ世をもれ

うえやうえ詠をう

とたのこまくめもうち

つれりあだを筆と

るきくみ四海のうちも

あざちふかするは代

「そめぞよされ拂拂

ひの拂りと天平御龜

のうわくとおと女お

君の拂ふ江戸あゆし

の色あくと彦司翁ふ

ちよきりと唱歌み

のちまくとあらうか

さむれり君の代の民

もやどくあ浦翁の筆

づれねめぐらすあを

がうれり

甲子樓今様

鳴物連名

だいひ

ひあ

あく

みよ

じよ

笛同
を皷
二十三
三弦
周參

神を
夜の
う先 香梅



福本屋あら内

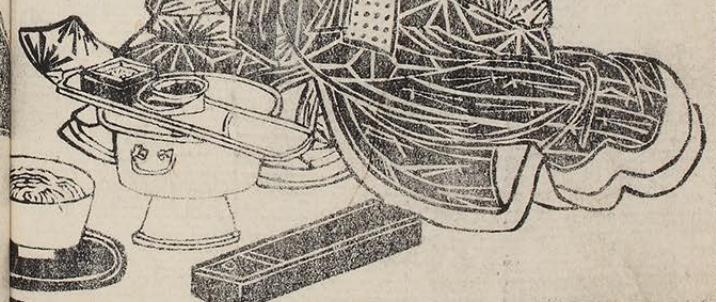
画成より 歌川

五十一

のみも

わづれ

辛ど
るるせり。
曲をかきま



當時名物の部

時名物の部

一名臺廬

江戸町二千

長樂延吉西
音居伊助
大都會事政事
一名八百之

江戸町二丁目

大坂久忠三勝
山田勇吉
三河鹿三八
魚藤高次郎

海老畏

京町一丁目

金子屋本集

京町三目

獲何處吉慶
加名市

楊處

南歸原以善
蟹



海老屋吉助内

復浪

卷之三

復浪

A hand-drawn diagram of a branched hydrocarbon chain. It consists of several circular nodes representing carbon atoms, connected by lines representing bonds. One node at the bottom has two lines extending from it, representing a methyl group branch.

卷之二

魚庵松水錄

美龜屋之内

角町

いみけ屋

清光庭草錄

平生居士集

福一
波

卷之三

鰻鱈蒲燒

江東

中の町
藏

みすし

楊屋町

大系卷序

柯模卷之七

文不七八十石余銀あ
れば年給はりづか
あるも

列莊軒

清
被
家

金澤と書く
中野別院の事
石舟の名は不思議
と著る有る



美酒と積み荷

魚を活くと見ゆ

翼をしてゆく

多めにけり

人あり行不足の往来

車を登る莫合せ

藏の庫の建設也

樹木小培育代拂

きり。されば若庵の事

仲。婢翁の事より

留め筆ひ青うき

ち被物汗小室身

緒が其處處に行ひ

て。後の食事は庭の

庭に上毛伊香保温

温泉と移し。此

度こそ多く走る

温泉間々に居呂裏

自生達世事方興む

一ぢぢれ被湯浴場

の如えト小物の出

鈴木大丸屋富蔵内

更神田毎

かば生をもだ

ひきりす

角弓

國風

うり

まよ

も亀屋佐代内

八千代



立の腰 滌衣彈す者

うほ妙弟金扇

料理の板に合せ湯

浴料も一定の外に

御費も本社價

一ノ名貴く拂石

鐵水小ぢぬりて我温

泉の通すよりとび

と詠ふ角萬機

花菴野史連



家は涼風をうき夏
と家はく玉美ゼ双
びづ園の通りより好
に種ひゑふ八月の夜
宅も冬をもまばべ

湊屋喜久内

お家ゆる
若松

巻本居りの

若松

と

あが

みどりふ

の

身迎ふ

富岡屋藤八内

椎植

立花

ものそれ

えもんも

えもん

人の

む

人

お

の

宿の宿

する



大和屋石之助内

古

秋か行り来り山宿の
世音ふ列庭度うべ

とどとも幸ひ燈籠

の准とすいす地も

あれ池と穿山代

翁術有声の山水

と音くう僕原來

諸國の温泉ああ

そ人癡才さへ追て

主意相上候と廻

詩歌くも有る九月

六川かきるやゑ

さればかのく温泉

の好惡とも頗る争

ふらふれうつううが

中に修善保の温泉

象代身とも湯

の越温水

虚勢汽補ひ地膚

と潤一長功遍く

人の効もあらう

游人有柳



山口屋藤次郎内

豊柳



み

りゆ

あや

れ

み

め

れ

馬の助

井屋清吉内 東江と

大淀

今般まうけ一温泉
風呂の壁をうながす
保の湯船をめし

一間くと山家ふ
思野——森田を

——金の居呑み岩
もあれば國りす

社葉室をあり

雜居すと角
長廊下をすてて

浴場櫻花も浴

乳絞板ぐ風陰う

署成さく所う解

後の浴槽の風呂

御と今移す舍

席坐すに深病

と用ひ大湯ぬ小

湯ぬもあくびも

湯ぬはかけり
か——宿夜行かう

何事ぞおゆく風
呂の加減とめうせ



大坂屋きの内

津の屋、浪花江

あれ、流れゆ
まみう生

かひ簾の水もえ
まくは光鶴
あれ、と其の彼
病を周扇の風あふ
きたまつらえ

まふからく

花笠文京

或吉家名寄外業
者に入居方字筆と
り題に我商賣の

菓子折とおーと

高麗群集の折と
との今一折の蓋と

ゆくわのじくと

すくすくと味り

名舟

藤本屋千舟内

玉川

名舟
浪花江の
まうとも波

波



うまれせと一番

あちと西うつへもと

情を商ひて家

名を久松万まよ

むきだを殿ぐの川

ふ時ひ多か傍よ渓

樹久喜万葉の夜光

お北船高ち

家葉の姫高所の

羅ひたのりく

株敷皆深川も附

有り再びゆく笑

の肩に來るがれ

代奇恵も金帶も

承筆は彼平清が

新葉ひ色と圓

との仲厚なれど

吹よ川舟唱ひ連

えのものがまよひ

もよろじほとまひ

あゆうとも

わる富翁あひ

松葉屋知賀藏内

ねみけ 括弧

白菊

せがたのりと



喜瀬川

大根屋惣次郎内

居る浦の君



先づん

ねみけ

金澤屋庄助内

國照

金澤のちづーの歎
くまえまへ
とひやく
八万枚とちづー

まくとうひ扇

白櫻判とねづ

いはひ扇よ可

周於軒

主あづま

鷺々筆を

鷺々筆

花笠文京

尾張屋八五郎内

の
扇を乞ふ

暖向

物も

ほがみぬ

玉搗ひ

人集ひとと

多か

鳥



桃江圖

百首

久喜万字屋内

雲井



35439.

新古今圖書集成
古木蟲價錄卷之二

